

## 1997 「国際交流実習Ⅰ」

ロバート・シャルコフ\* 小粥 良\*\* 中村幸士郎\*\*

### 1997 WORKSHOP for INTERNATIONAL EXCHANGE I

Robert SCHALKOFF\*, Ryo KOGAI\*\*, Koshiro NAKAMURA\*\*

キーワード：国際交流、実践英語、異文化への感受性、自己および自文化への認識、immersion, reflective writing

#### 【はじめに】

「国際交流実習Ⅰ」を、昨年度に続いて今年度も、国際理解教育教室の1年生全員(11名：男2、女9)に対して、9月1日(月)から5日(金)までの4泊5日の間、国立山口徳地少年自然の家で実施した。本稿はその実践教育の報告であり、目的・プログラム内容・評価・今後への課題等について、関係者の間で討議し分担執筆したものである。

指導者兼執筆者の3名については、国際交流体験やこの種の実地訓練の経験を含めて、昨年度の報告書で紹介した通りである<sup>1)</sup>。役割分担としては、中村が全体の責任と総務的な仕事を、小粥が英語の発音と聞き取り指導・外国人教員や留学生等の参加者6名<sup>2)</sup>の世話・プログラムの進行や会計等の仕事を、シャルコフが実習の主要部分を占める班別討議(I)～(IV)と全体会議で、異文化理解を中心にした実践英語の訓練を行い、更に英語の歌やゲームの指導も担当した。英語劇の指導は、シャルコフが風邪で体調を崩したために、外国人参加者と学生の自主性に任せる形になった。

宿泊施設とその環境もすばらしく、成果が大いに期待された。ただ、学生には夏の疲れと試験直前の焦りがあり、指導者は3人共直前までそれぞれに海外研修その他で多忙を極め、事前の打ち合わせが充分できなかったため、やや心配な点も皆無ではなかった。

註1) “1996 WORKSHOP for INTERCULTURAL UNDERSTANDING”『山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』第8号、255-85頁。

註2) 外国人参加者名簿(アイウエオ順。かっこ内は出身国)

アキラ・フルサワ(イギリス)	山口県国際交流員
キャサリン・エバースト(イギリス)	フルサワ氏の友人
除 善宜〔シュー・シャンイー〕(台湾)	山口大学経済学部留学生
ジェニファー・フィールデン(オーストラリア)	山口大学教育学部留学生
ジョン・フィリップス(イギリス)	山口大学人文学部助教授

\*山口県立大学看護学部 \*\*山口大学教育学部

## [目的について]

教員養成課程の国際理解教育においては、特に理論と実践の両側面が車の両輪のように極めて重要である。国際交流がますます盛んになり重要性が高まってきているので、理論教育だけで卒業生を学校や社会に送り出す訳には行かない。学校の内と外を問わず、実践としての国際交流の実施が必ず課せられることを覚悟しなければならない。従って、国際交流の実体験と、企画実施運営等の訓練を通しての実際的な実施能力養成が不可欠となる。

国際理解教育教室では、「国際交流実習Ⅰ」と「国際交流実習Ⅱ」を、1単位ずつ必修専門授業科目として指定し、前者を1年次前期で、後者を3年次前期で実施することになっている。1年次では、早期に国際理解教育全体の学習目標を明確にし、意識的な動機付けを行い、4年間にわたってその実力を十分に持続的に養成するための、基礎教育と基礎訓練を目的としている。3年次では、これらの点を中間段階で再確認し、更に本格的に自主的に取り組み、国際交流や異文化体験のための総合的な実践能力を、海外での研修を通して養成することを目的としている。

「国際交流実習Ⅰ」では、英語を母国語とする外国人教師に指導を依頼し、留学生等数名の協力を得て、4泊5日の合同合宿を通して、①英語による実践英語の特別集中訓練、②国際交流および異文化体験、③国際交流・国際理解・異文化理解等に関する目的や方法論についての基本的な理解と実践、④これらの活動を通じての教室内の学生間及び教師や留学生達との親密な人間関係の育成、等が目的である。

「国際交流実習Ⅱ」では、先ず第1回を1998年3月に、「マレーシア・シンガポール研修旅行」(24日間)として実施する予定で現在企画中であり、異文化交流体験学習と語学研修を組み合わせている。マラヤ大学で9泊、農村ホームステイ3泊、マラッカでホテル1泊、REL C(東南アジア大臣機構の語学研修所)で9泊する予定である。今回は学生14名と指導者1名の15名のグループ編成で、自主的運営による団体訓練はもちろんのこと、一人一人が、まず体調を常に整え、異文化に対する好奇心を旺盛に持ち、英語で積極的に交流していく態度を養うことにより、初めて現地の人々の中で楽しく生き生きと有意義に生活し交流し学び合える異文化交流体験を実施する。その目的は次の通りである。①カルチャーショック体験と、それを乗り越え適応していく体力・生活力・英語力・コミュニケーション能力・社交性・協調性等々の訓練。異なる衣食住・ことば・風土・気候・生活習慣・環境などに適応するためには、体験を通じた適応力の養成がまず基本となる。②現地の人々特に若者や子供達との交流。様々な教育現場やホームステイによる家庭内での交流から、その国の生活・文化・宗教・教育・スポーツ・政治・経済等の実状を、真に体験的に学習することができ、また友情を育み親近感を深めることができる。③それらを通して自国の歴史や文化への、更に世界の歴史や文化や人々への強い関心を目覚めさせること、またそこから国際理解や国際理解教育の必要性への内発的な強い自覚を促すこと。④異文化交流体験を通しての新たな自己発見や自己認識と、将来への各自の目標や方向性の明確な意識化を計ること、等々。

「国際交流実習Ⅰ」と「国際交流実習Ⅱ」とは、このように発展的に密接に関係づけられることが肝要である。つまり、四年間の専門教育の中に、双方が正しく位置づけられる

と共に、後者を射程距離に入れた前者の実践教育が当然望まれる。このような実践教育は、初めからすべてを完璧に意図し企画し実行することは難しい。しかし、先ず実践し、反省し、話し合う中で、いろいろな点が明確になり、改善でき、より良きものが実現できる。このことは、実践教育特有の大きな学習効果であり、教官と学生双方にとっての生き生きとした成長であり、喜びでもある。

上記の目的を実現するために、今年も新進気鋭のロバート・シャルコフ先生に主要部分の担当をお願いした。アメリカの大学院で夏の休暇を利用して研究中の、最新の実践英語教育法と異文化理解教育法を、昨年に続き思う存分自由に授業展開してくれるよう依頼した。学生達に活発に話し合いをさせ、発表させ、考えさせ、意識を少しずつ改革し向上させ、頭と身体を同時に早いテンポで活動させて、どんどん進めていく授業展開は、日本では大変珍しく、学生達に必ずや驚きと満足を約束してくれると期待しているからである。  
(中村)

### 〔班別ディスカッション・ホームステイのシュミレーション・全体会議等について〕

ロバート・シャルコフの報告は、今年度のワークショップ計画に至るまでの経緯と実際のワークショップ実施についての2部から成り立っている。それぞれ intercultural-sensitivity (Bennett1986) に関する私自身の定義に沿って説明を進め、最後には今後のワークショップの課題について述べることにする。

まず、Intercultural-sensitivity (「相互文化的感受性」とでも訳せようか) とは何であろうか。intercultural と sensitivity という語は現在よく使われる言葉なので、その双方の言葉の持つ意味はその語を使用する者にとっては自明の理と思われるかもしれない。しかし、intercultural-sensitivity その語の意味を求められたとき、初めてそれに対する一人一人の概念の違いが明らかになるのである。そのため、私がいかにこのワークショップを実施したかを話す前に、私が考える intercultural-sensitivity について述べておきたい。

私は intercultural-sensitivity を、「他者、および自身の行動や感情は、文化によって影響を受けて形成されるものと認識する能力」と見ている。そして文化に違いがあるため、それに影響を受けた人々の行動や感情にも違いが現れて当然だとみなし、「違っている」という理由でどちらかに優劣を付けるのではなく、「ただ違っている」ということを認めて受け入れる能力であるともいえよう。Bennett も *Towards-Ethnorelativism* (1993) の中で、この違いの取り扱い方で intercultural-sensitivity のレベルを測ることができる」と述べている。この intercultural-sensitivity は生まれつき備わっている能力ではなく、またある人にはあってある人にはないというものでもない。もし仮にこの能力が生まれながらにして人間に備わっていたならば、あれ程多くの戦争は起こっていなかっただろう、と彼は語っている。

さて、実際 intercultural-communication (相互文化コミュニケーション) を教えるには多くの方法があるが (Banks 1997, Seele 1994, Kohls and Knight 1994, Gaston 1992, J.Bennett 1984, Damen 1983, Paige and Martin 1983, Pusch 1981)、このワークショップでの私の目標は、いかに学生の intercultural-sensitivity を高めるかということ

とに定め、以下のような違いの扱い方のプロセスを準備した。(資料1) これは資料でわかるように4つの段階に分かれており、文化と文化の違いに気づくことが大きなポイントとなっている。まずここで昨年のワークショップを振り返ることから始めて、今年度ワークショップの計画づくり、実施へと順を追って述べることにする。

## 準備・計画

### 1) 昨年度のワークショップ

昨年のワークショップから私は2つの問題に気づいた。まず1つは、4～5人で行うことの多かったグループ活動についてである。4～5人という人数のため、多少消極的な学生はいつも聞き役になってしまい、発言する機会が少なくなってしまった。また、ある学生は他のメンバーに任せきりで話し合いにあまり参加しないという態度が時々目についたことだ。2つ目は、外国人ヘルパーを交えてのL2(外国語、ここでは英語)でのsimulationやdiscussion等を多く計画していたが、学生のL2のレベルに個人差があったこと、discussion技能の不足等の理由により計画通りの実行は困難なものとなったことである。その上、外国人ヘルパー自身がどのようにしたら学生たちの意見を聞き出すことができるか、どのようにdiscussionを進めていくべきか、という方法を心得ておらず、なかなかスムーズにいかなかった。そこで、discussionで使う言葉をL2からL1(母国語、ここでは日本語)に変え、ヘルパー無しで話し合いを試みたところ、驚いたことに学生たちは大変元気づいて多くのアイデアを生み出したのである。

これらの反省に基づき、今年度ワークショップの計画段階でdiscussionは私も学生もL1を使用すること、学生たちには4～5人のグループワークをやめ、ペアワークをさせることにした。しかし、私はまだ依然として外国人ヘルパーの参加の仕方に課題を残していた。

### 2) その他

この時期私はTESOLにおけるMA取得のため米国へ旅立つこととなった。そこで気づいたことがこのワークショップに大きな影響を与えることになった。Intercultural-sensitivityの指導においてはTop-Down方式ではなくBottom-Up方式を取り入れる、ということである。つまり、いくつかのimmersion(異文化体験)を経験することを通してintercultural-sensitivityの持つ意味について考えていくという方法である。そこで私は学生たちに実際経験してもらうためのimmersionをいくつか考えることし、種々のintercultural-training教本の中にそれらを探し始めた。最終的に「米国での初対面の挨拶」、「米国での贈答品の受け渡し」、「米国の町について」、そして「典型的な米国人の週末」という4つの場面を想定することにした。これらは日本人学生が米国へホームステイに行った場合に起こると予想される順序に従って、一つのストーリーのように進めることにした。

### 3) ワークショップのGoalsとObjectives

このワークショップにおいて私のgoalsは、①米国文化のimmersionを通して学生たちのintercultural-sensitivityを高めること ②experienceとreflectionを通し学生たちにintercultural-sensitivityとは何であるかを考えさせること。またobjectivesは、

①プロセス(資料1)を通して米国文化と日本文化との違いについて考える ②日米両文化に対して一層理解を深める ③interpretation(主観的解釈)に左右されずobservation(客観的観察)をできる能力を養う ④米国文化と日本文化との違いを分析し自分なりの仮説をたててみる ⑤仮説に基づき考えた上で行動をする ⑥他人の意見に心を開くことができるように ⑦reflectionすることの重要性を知る ⑧immersionの中で使う言葉の背景にある文化について考えながら正しい発音、抑揚を身につける。

以上のようにそれぞれを定め、私自身に対してもこれらと同じgoalsとobjectivesを掲げた。

#### 5) 授業の組み立て

班別ディスカッションに割り当てられた1日2時間は次のように進めることにした。①あらかじめ書いておいたその日のagendaとobjectivesを学生と共に確認する ②ウォームアップ ③前日の授業のreflection-writingについてのdiscussion ④immersionのためのL2(英語)の練習 ⑤immersion ⑥宿題としてreflective-writingを与える。

ここで授業の中心となるimmersionは、先に述べた米国での4つの場面と私のプロセスを利用して次のようにする。まず、immersionの中で必要なL2を練習し、実際のimmersionを始めてみる。Immersionの中で学生達は事前に練習した英語を使い、さらにアメリカ人らしい行動や表情をするように指示を与えた。その後私は学生達にinterpretationsによるのではなくobservationsに基づいて、どんな行動や表情が求められたのか皆で話し合わせ黒板に書き上げていった。そしてそれと日本の習慣との違いについて語り合い、その背景にあるものについて考え、再びimmersionに挑戦した。これがここで私の言っているimmersionの流れである。各immersionの体験後、reflective-writingを書く宿題を与える。

L2はそれぞれのimmersionに入るための刺激と入り口を提供したが、それは各授業の焦点ではなかった。以前に述べたように、私は各授業のreflectionの段階で明瞭さと理解を深めるためL1(日本語)を使うことにした。このようにこのワークショップの私の担当する部分は語学ワークショップとしてよりもintercultural-sensitivityのワークショップとなることとし、学生達にintercultural-sensitivity発達の一つの入門訓練をする機会を与えるよう計画した。

#### 実施

##### 1) 第1課、第1日目夜(資料2)

Objectives : ①各人の名前を知る ②学生達にペアワーク体験をしてもらう ③feedbackについての説明と実施 ④ワークショップに参加している各人の個人的目標を発表し自覚を持たせる ⑤私の授業方法を体験してもらう。⑤については宿題としてreflective-writing(資料3)を書かせ、翌日の授業の材料とした。

##### Reflections :

ほぼ授業のobjectivesは達成されたと思う。学生達の多くは互いのファーストネームを知らなかったので、最初の活動はお互いを知るようになる良い方法だった。またそれは外国人ヘルパーが学生達を、またヘルパー同士を知るようになるのにも役立った。学生、

ヘルパー、教員はペアで、また時には小グループでよく活動した。Faculty-Fish-Bowlは少し長すぎて学生達は私が思っていた程には興味を持たなかった。3人の教員の話す英語のレベルはかなり高く、学生が話されたことを全て理解できたか否かと少し疑問が残った。

授業の後半では学生達の意見交換が盛んになり、計画した内容を全て終了させることは困難であったので、内容を少し減らしそれぞれにもっと時間をかければよかったと思う。授業の最後にfeedbackを書くことを学生に求め、学生達は授業のどの部分が気に入りどの部分が気に入らなかったか、私に伝えるよう指示した。その際、学生たちにfeedbackを書くことへのプレッシャーを与えたくなかったのでテスト用紙のような紙ではなく、きれいな色付きの小さなカードを使い自由に意見を書くように指示した。

## 2) 第2課、第2日目朝(資料4)

Objectives : ①昨晚の授業について話し合う ②observationsとimpressionsとの違いについて気づく ③Immersion 1-「米国での初対面の挨拶」④intercultural-sensitivityとは何か考え始める。

### Reflections :

この日のobjectivesはほとんど達成された。昨夜の授業を振り返りながら私の意図したこと、学生に求めたことを伝えた。加えて、observationsとinterpretationsとの違いを学生達に気づかせる機会を与えることができた。私は学生達に宿題の第2問「この授業は皆さんがこれまで受けた他の英語授業とどう違っていましたか?」という質問に対する意見を聞いてみた。(資料5) 私は黒板を2つの欄に分けて、「輪になって座っていたので互いの顔を見ながら授業ができた」、「私たちはゲームをした」、「文法はやらなかった」、そして「教室には花が飾ってあった」などというobservationsを一方の欄に書き、もう一方の欄には、「自分たちで授業を作った」、「面白かった」、「文法は難しい」、そして「授業の雰囲気よかった」などというinterpretationsを書いた。

これらのことを利用しながら私は学生にobservationsとinterpretationsの違いについて説明した。この2つの差異を認識することが、異文化を分析し理解していく上で非常に重要な鍵となってくる。異文化を考える時、interpretationsの方面からだけの見方をすると、多くの誤解が生じてしまうことは言うまでもないだろう。

私はImmersionに入る前に、immersionの中で使われる会話をマスターするために、four-skills (reading/writing/listening/speaking) 全てを使って取り組んだ。このパートは私が思っていた以上に時間を要したが、私はここで英語を話すことではなく、米国での挨拶と日本文化における挨拶の違いに気づくことに全エネルギーを集中できるように望んで指導した。そういう意味では会話はもう少し短くしておくべきだったかもしれない。言葉の練習に続き、私のプロセスについての説明を行った。

当初4人の学生だけにImmersion体験をやらせようと計画していたが、やっていくうちに学生たち全員に体験させる方がより効果がありそうだと直感し、その場で計画を変更した。しかし、これは思った以上に時間がかかり、指導が一層困難になった。私は全ての学生に登場人物両方の役割を少なくとも1回は試みる機会を与え、その後いったん中断させて指示を与えた。まず二人の学生を例に取り、アイコンタクト(視線を合わすこと)の

指導をした。その後全員の学生にアイコンタクトに精神を集中させてimmersionを続けさせた。少したって、再びその練習を中断し、別の2人を例に取り、今度は顔の表情に意識を集中するよう指導した。同じように次はお辞儀をしないで握手をするように指示した。この方法によりどの学生も順番に私の指示の受け取り手にさせることができた。ここでの指導はほとんど英語で行った。学生達にとってこのimmersionで最も困難なのは「お辞儀をしない」という部分であった。しかしこのことは、文化がある種の身体を動かす行動に影響するという点について、深く考えるきっかけとなった。

Immersionの後、学生達に今のimmersionの中ではどんなことがあったか、それらがどんな順番で起こったか、日本語で(L1)述べてもらおうとしたが、何の反応も得られなかった。そこでもう一度説明をすると彼らは「最初にアイコンタクトをとって、握手をした」というように少しずつ答え始めた。次に私は学生たちの答えに沿ってそれぞれの行動の背後にある理由について質問したが、学生達は困惑の表情を見せ黙り込んでしまった。ここで彼らをペアにし、話し合ってもらったところ、私自身が今までに思いつかなかったような意見までもがでてきた。(資料5)

ここでは学生たちにこのimmersionについて考え分析してもらいたかったので、私個人の意見を口にするのは控えることにして、全ての意見がでた後で、学生からの質問を受けた。

全ての考えを聞いた上で再びimmersionに戻って行くことにした。今度は学生達にどうしたらもっとアメリカ人らしく出来るか、と問いかけてみた。彼らは一生懸命笑顔を作り、お辞儀をしないように、そしてアメリカ人になろうと頑張ってくれていた。後で行ったfeedbackの中で、ある学生は「自分はアメリカ人になれたような気がした」と言い、ある学生は「お辞儀はすでに習慣づいているものだから、お辞儀をしないことは大変難しい」と言った。また他の学生は「あらゆることを考え過ぎてかえって難しくなったしまった」と言った。これらのfeedbackを学生はL1で行い、私は学生達の言ったことをその場ですぐにL2(英語)で繰り返すcounselingをした。これには2つの理由があった。1つは私は学生達に彼らの言っていることを理解していると知ってほしかったためで、2つ目は自分たちの意見を英語にするとどうなるかということを目で聞くチャンスを与えたかったからだ。学生達の多くが、私の英語によるcounselingを熱心に聞き、私の言っていることを理解しているようであった。

宿題としてreflective-writingを出した。(資料3)

その晩翌日の計画をたてながら今日のレッスンで私のプロセスの中で重要な位置を占める「違いに気づく」という部分を飛ばしてしまった、ということに気づいた。翌日以降のレッスンの中では必ず取り入れることにした。

### 3) 第3課、第3日目朝(資料6)

Objectives : ①グループで前日の授業に対する reflections についての意見交換 ②intercultural-sensitivityについて ③Immersion 2-「米国における贈答品の受け渡し方」

Reflections : 私は宿題として出した質問内容の範囲の広さについて気づいていなかった。(資料3)特に質問2、質問3については多くの意見が出され、それについてdiscussionするだけで十分中身のあるレッスンになるところであった。しかし、この日の他の

計画もあったので次へ進むことにした。

語学レッスンにおいて学生達が一度その会話を聞いたらパズルのようにそれを組み合わせる事が出来る、ターゲット会話の分割バージョンを私は用意していた。あらかじめそれぞれの会話を一文ずつ書き込んだ厚紙を用意し、全会話を読んだ後学生たちにそれを正しい順番で黒板に並べさせた。学生たちは非常にすばやくこのことをやり終えたので、私はいちいち黒板に書き出す必要がなく時間の節約にもなった。発音の練習の前に私はその会話を3度読み、(CLLサークルのように)(Curran1976)これが学生達をすっかりその会話の雰囲気に触れさせて、抑揚練習を容易にさせた。何人かの学生は私と非常によく似た抑揚をするようになり、注意深く聞いていてくれたことがわかった。その後この日はストレス(強弱)とフィーリングの練習に多く取り組み、個々の発音にはそれほど時間をかけなかった。

今回は全ての学生が immersion 体験が出来るように最初から計画していた上、休憩中に授業に先立って教室を使いやすくするためイスを並べ替えていたので、immersion 2 は前日よりスムーズに行えた。また immersion の分析についても一度やり方を経験しているので、初回ほどの抵抗もなく活発だった。(資料7)

多くの意見は “You shouldn't have.”、というフレーズに集中し、そう言いながらも贈り物を受け取るアメリカ人の態度は、日本人に共通するものがあると知り驚きを示していた。

学生達はこの immersion の中で大きな役割を果たし、日本文化の中ではあまり表面に現れない感情表現に苦心しているようで、私の指導の多くはこのことに当てられた。この時点で彼らの中には immersion にうまく適応している者がいる一方で、異なった価値様式を受け入れる事がうまく出来ない者もいた。両グループの学生の immersion に対する反応は全く異なったものであった。このアメリカ式贈り物の贈り方を受け入れられない学生は、「プレゼントをもらった時の反応が大げさすぎると思った。アメリカ人にとっては普通の反応かもしれないけれど、僕にとっては不自然すぎた。」とか「片手で贈り物を差し出すのはよいマナーではない。」と言うような意見を持ち、Bennettの言う「defense」の段階に入り、他方では、その状況を素直に受け入れられる学生達もいた。

私はワークショップを開始する前に学生たちの intercultural-sensitivity のレベルには個人差があるだろうと覚悟していたが、immersion に対する反応についても同じように個人差があることには気づいていなかった。この授業に入って初めて学生達は Bennett の developmental-model のいろいろな段階にいるのだとわかり始めた。以前述べたように何人かの学生は「自分たちの考え方が他の者のそれより優れている」と考えている、いわゆる defense 段階に入っており、またある学生は「人間は同じ人間であるので文化という壁を取り払えば全て同じものだ」と考えている、いわゆる minimization 段階にいる者もいた。また、さらに上の段階にいる者もおり、彼らは文化の違い、それに影響を受ける行動の違いに気づき、それを受け入れようとしていた。

ここで私の指導はそれぞれの段階にいる学生が次の段階へと進むためにそれぞれ違った方法で接することを求められたが、これは思っていたほどには容易ではなかった。個々の指導については詳細を省略する。

この時点でヘルパー達もまた Bennett の developmental-model において様々な段階にあるということにも気づき始めていた。ある者は defense 段階と minimization 段階を状



況によって行ったり来たりしていたので、ヘルパー達を指導者としてではなく、学生と同じ立場で授業へ参加するように計画していた私の判断は正しかったと思う。Bennettは「ヘルパーはある程度 intercultural-education の訓練を受け、他文化の中で生まれ育ったという理由だけで選ばれるべきではなく、ヘルパーは指導者となるために指導を受ける者よりも developmental-model の 1、2 段上の段階にいない限り効果はない」と言っている。

#### 4) 第4課、第4日目朝(資料8)

Objectives : この課はこれまでの授業と少し異なっていて① Immersion 3として Islamabad-technique (Stevick, 1980) というものを使って学生たちに自分の生まれ育った家の周辺の様子について英語で説明してもらう ②私が生まれ育った家の周辺の様子と学生のそれを比べる。(Islamabad-techniqueについては資料8を参照。)

Reflections : 本日のメインテーマに入る前に毎回やっているように前日の宿題について discussion した。その後本日のメインテーマである Islamabad-technique の利用を始めた。ここで私は学生の中から一人のボランティアを募り、円形になって座っている学生の中心に私と共に座ってもらった。私は彼女に Cuisenaire-Rods (色付きの積み木セット) を渡し、それを自由に使いながら彼女の生まれ育った家の周辺の様子について英語で話をしてくれるように頼んだ。彼女を取り囲んでいる学生には、彼女の話に黙って聞いておくように指示をした。最初は何から手を付けてよいか困っていた彼女も、しばらくすると自分流の方法で町を作り始め同時に語り始めた。私は彼女の話す一文一文の英語をネイティブの話す英語表現に替えながら counseling した。その時私は彼女の目を見るのではなく彼女の動かしている rods を見るように注意していた。このことは彼女にプレッシャーを感じずに話をしてほしいという islamabad-technique の1つを利用したのである。(Stevick1980) 次第に彼女は自分のペースをつかみ、まるで rods での遊びを楽しんでいるかのように近所の様子を語り、そこで起こったいくつかの思い出話を聞かせてくれた。

話が終わった後、周りで聞いていた学生に彼女の話の中から何でもよいので覚えていくことを一つずつ教えてくれるように頼んだ。私はこの学生たちからの答えについても counseling を行い、これが一通り終わったところで、聞き手であった学生たちに話し手である彼女に何か質問があれば聞くようにと促した。彼らは質問し始め、話し手はそれらの質問に答えるため再び rods を利用して答えていった。私はここで学生たちの話が英語であるにも関わらず非常に細かい部分にまで及んでいたことに驚き、このテクニックの利用は成功したと思った。

第2段階として、学生たちをペアにさせ、それぞれ話し手と聞き手を決めて同じことをさせた。私はそれぞれのペアの間を回りながら学生が rods を使うことでよいプレッシャーを感じず、わりと流暢な英語で作業を続けていることに満足した。

時間がなくなってきたので最後に私自身が rods を使って私が生まれ育った家の周辺の様子について話し、学生に聞いてもらうことで授業を締めくくることができた。残念ながら私の話した近所の様子と彼らが話してくれたそれとの違いを比較して分析する時間はなくなってしまった。

#### 5) 第5課、第4日目午後(資料9)

Objectives : この最後から2番目の授業において①学生達に彼らの文化と彼らが経験してきた米国文化と、それ以外の文化との違いを見るため各国から来ているヘルパーたちにこの授業への参加を求め、Immersion 4「週末の過ごし方」を行う。ここでは再びrodsを使用する。②Immersion 4を振り返り自分たちでプロセスを利用して分析する。

Reflections : まず最初に私がアメリカでの家族の日曜日の過ごし方についてrodsを使って話し、それから学生達はグループに分かれ、ヘルパーに自分の家族の日曜日の過ごし方について話した。この時点で学生達は前述の Islamabad-technique の手順について多少知識があったのでこれはスムーズに運んだ。休憩の後、今度はヘルパー達が自分の家族の週末について語り、話が終わった後学生たちが理解できたことを確かめるため、聞いた話を簡単に口頭でまとめてもらい、それを文章にし、話が正しく伝わっているかヘルパーに確かめてもらった。ここでプロセスの2つ目の段階(違いに気づく)に進んでもらうことにした。しかし今までの immersion と違って、文化の一部ではなく週末という広範囲のトピックスのため学生は少し戸惑ってしまった。私は話の中から1つか2つに焦点を決め分析するようにアドバイスした。

#### 6) 第6課、第5日目朝(資料10)

Objectives : このワークショップ最終日にあたり、私の objectives は次の4点について学生に reflective-writing をしてもらうことである。① immersion を通して言語、文化について最も感じたことは何か ② immersion を体験する中で一番難しかったこと ③ immersion 体験を終えた今、intercultural-sensitivity は何を意味すると思うか ④ 自分は以前と比べてどのように interculturally-sensitive になったと思うか例を挙げて説明する。以上をL2(英語)で書くように指示し、これによってこれまで教えてきた5課に関して feedback を兼ねてもらうことにした。

Reflections : この課を始める前に、私が米国の知人から受け取った簡単な手紙を読むことから入った。(資料10)これは私が扱ったアメリカでの贈答品の受け渡しの immersion とも関連していたからだ。その後 reflective-writing を始めたが、これは私が計画していたより時間が長くかかってしまった。理由の1つはそれらを英語で書くことを求めたためであり、さらに学生たちの思考はこの段階ではL2で表現するにはあまりに複雑になっていたためと思われる。そして何人かの学生にとってはL2でいかに自分の気持ちを表現するかがテーマとなってしまう、知らず知らずのうちに私は昨年度と同じ過ちを犯してしまった。

しかしながら、多くの時間を要しはしたが、学生は自分たちの考えをかなり具体的に述べてもいた。私はもしこの課題を日本語で与えていたとしたら、彼らの反応の深さはどうであったらうかと考えている。

#### 7) 第7課、第5日目午後(資料11)

Objectives : ワークショップ最終の授業では皆が一人一人ワークショップの感想と今後いかに自分の intercultural-sensitivity を高めていくかについて簡明に英語で話すことで

あった。

Reflections : この時点までに学生達は極めて疲れていたもので、すべての計画を実行することは取りやめ、ネーム&ゴールゲームを実施し、ここでRaindanceを取り入れた。このアクティビティは皆の協力によって成功をもたらすものでこのワークショップを締めくくするのに相応しいやり方だと思ったからである。

#### ワークショップのgoalsについての評価

評価を始める前にワークショップのgoalsをもう一度見てみよう。①米国文化のimmersionを通して学生たちのintercultural-sensitivityを高めること ② experienceとreflectionというプロセスを通し学生たちにintercultural-sensitivityとは何であるか考えさせること、の2つである。私はこの5日間のワークショップを通して、特に2日目～4日目に、学生たちが自分たちの日本文化とアメリカ文化をはじめ他の文化との違いについて敏感になり、多くのことに気づくようになったと感じた。学生の反応やwritingを見てみると：“Before this lesson I had not experienced other cultures.”、“Before I took part in this class, I’ve never thought why the difference (between cultures) was occurred.” (学生原文による) というように、当初多くの学生はBennettのモデルのIsolationの段階にいたようである。しかしながら、このワークショップの進行につれて、学生は他文化にふれることを通じ文化の違いに気づき、次の段階へと進んでいった：“I experienced other culture in this five days...I found some differences between Japanese culture and American culture and every time I found a difference I thought the reason why the difference happened...I have become more interculturally sensitive”、“Through this five days...I noticed to think why the difference was occurred is very important.” (学生原文による)

また学生は5日間毎日reflective-writingの中でintercultural-sensitivityとは何であるかについて書くこととされており、この質問に対して：Reflective writing 2: 「文化間の違いに気づき、分析し、理解し、身につけること。」 Reflective writing 3: 「異文化を理解し、受け入れる柔軟性を持つことであって、異文化を鵜呑みにすることではないと思う。つまり全てを尊重する姿勢を養う。」 Reflective writing 4: 「どちらの文化がよいかを決めるのではなく、それぞれの文化の価値を認める柔軟性を持つこと。」 Final reflective writing: “I think intercultural sensitivity means to understand another culture and respect both of them because all culture have reason why it became like that. In order to develop intercultural sensitivity we should have many chances to experience. Then we should understand that culture and admit both my culture and that culture have worth.”と答えており、最初は私の違いの取り扱いのプロセスをそのまま書いていたようだが、最終的にはintercultural-sensitivityを幅広く捕らえ、自分なりのdefinitionを持ち自分の言葉で表現できるようになっていた。ここに記載していない学生のreflective-writingにも同様の成長が見られる。

#### 将来への考察

私は今回のワークショップを終えた今、来年度のワークショップについて考える時、以

下の4点について考慮する必要があると思っている。

まず第1点はL1とL2の使用割合である。この件に関しては、私は今年度の場合は語学教育よりもむしろ intercultural-education へ力を入れ計画したため、活動の多くで学生達にL1を使うよう指示した。来年度の計画にあたって、どの程度L1を使用し、どの程度L2を使用すべきかということに対しての方針を見いだすために、ワークショップ自体の目標がより明らかにされなければならないと思っている。

そして、第2にワークショップに参加する外国人ヘルパーをいかに有効に活用するかということで、これはそれほど簡単なことではないと思っている。最初のステップとしてはヘルパー達に対して事前に短期間のトレーニングセッション（訓練期間）を持つことであろう。このトレーニングセッションでは特に日本人学生と作業することに関しての訓練はもちろんのこと、何らかの intercultural 訓練を含むことになろう。ヘルパーの訓練は学生達がヘルパーたちとの相互活動で成果を上げるために大変役立つことであり、ヘルパー達自身にとっても大変有益となることと考えている。

第3に私の作成したプロセスの一部を変更する必要性である。現在の私のプロセスの第2段階である「違いに気づく」というステージの前に、“reflection” という段階を設けるべきだと考える。これは新たな課題である。

最後に私自身が intercultural-education においてもっと有能になるように努力する必要がある、immersion に対する学生の反応をどう扱うべきか、またどう指導すべきか研究する必要がある。教育者として私自身がより相互文化的に感受性を持てるような方向へと進んでいけるように、また自分自身の intercultural-sensitivity を高めるために、今までの経験を振り返ると同時に、この分野における専門家によるトレーニングを積極的に受け入れ、更に研究を進めて行くことが私の今後の課題である。 (シャルコフ)

### [発音指導 (1) (2) (3)]

英語発音の指導は小粥が担当した。直前まで、やはり5日間のドイツ語合宿（西日本独文学会主催インター・ユニ・ドイツ語ゼミナール）があり、そちらの準備と指導もあったので、新たな教材を準備する余裕がなく、基本的には昨年と同じ教材で同じ内容を教えることとした。昨年よりも発音指導の時間が一回分多く取れたので、ゆっくりとしたペースで個々の学生に発音練習させることができた。

本来、発音指導というものは、長期にわたって継続的に行うべき性質のものであると考えるが、そのような機会が一年生のカリキュラムに特に設けられていないことを鑑みて、この実習中に短期集中的に、英語発音、特にアメリカ英語の発音の特徴について、学生が知っておいた方が望ましいと思われる点について解説と口頭練習を行うこととした。

発音 (1) では特に母音を扱い、高校までの英語授業の中ではおそらく教えられていない細かな発音の区別を扱った。長母音の [i:] と短母音の [i]、長母音の [u:] と短母音の [u] の発音の仕方には根本的な違いがあるのだが、多くの学生は、ただ音の長短の違いに過ぎないと思っている。しかし、実際は音の長さよりも、音の質の違いの方が重要であり、アメリカ人には短母音であっても比較的長めに発音する人もいる。これらの音の差異は、音の長さによって決定されているのではなく、そもそも別の母音として捉えるべきであろう。従って、それぞれの音を発音する際の口の形の違いを理解し、口の中のどの辺

りで作られる音か（どこに息が当てられるか）を、実際に自分の感覚を通して理解する必要がある。そこで、教師が発音して口の形を見せ、黒板に図を書いて、口腔内で音の作られる場所を示し、学生に教師の発音を模倣させた。発音は、最終的には模倣によって体感され、実感をもって修得される他は無いが、闇雲に模倣させるだけでは効果が低いと思われる。発音修得のプロセスには、まず音の違いを聞き分け、口の形の違い、息の当てられる場所を知り、しかる後に自分で発音してみて、自分の声を聞きつつ音の同一性を確認し、口腔内での音の振動を感じ取りつつ感覚的に了解していくという段階が存在すると考える。そして、音の差異が一旦自らの感覚を通して把握され、区別して発音することができるようになれば、聞き取りの際にもその差異が知覚されるようになるのではないか。

長母音 [i] と短母音 [i:] という対立項は、音の長短という差異によって成り立つ対立項ではなく、音の質の差異によって成り立つ対立項であるが、そうした差異の対立項から全体のシステムが成り立っていることは、一つの対立項を了解した時に、予感され得るのではないか。例えば、it と eat が区別されるのは、音の長さによるのではない。[i] は比較的長く発音され得るし、逆に [i:] が比較的短く発音される場合もある。しかし、英語を母語とする者は、確実にこれらの2つの語を聞き分ける。その差異を可能ならしめているのが、[i] と [i:] という2つの母音の根本的な音質の差異なのである。このことを了解する時、soot [sut] と suit [su:t] の差異を理解することは、より容易になるだろう。こうした差異は [a] と [ʌ]、[a:r] と [ə:] などについても言えることである。Tommy と tummy、carve と curve の発音の差異は、日本人には識別するのが難しいが、その差異を自分の感覚の中で明瞭化していかなければならない。というのも、これらの音は対立するものであり、その差異によって意味の違いが生じ得ているのだ。英語では特に母音の数が多く、カタカナで「ア」とか「オ」とか表記され得るような音が複数存在するわけだが、それらの音に違いがあるということを認識するだけでなく、その差異感覚を自分のものとするべきであろう。

発音(2)では、子音を扱い、日本人が特に困難と感じがちな発音を取り上げた。その際、[b] と [v]、[s] と [θ] などの日本人の耳には区別の難しいような発音の違い、[s] と [ʃ]、[ts] と [tʃ]、[dʒ] と [ʒ] などの似通ってはいるが区別されるべき発音を特に取り上げた。ここでもまた音の差異のシステムを成立させることが問題となっている。bat と vat は区別されねばならないし、その区別によって意味の違いも生じているわけである。この差異は受動的にも能動的にも明瞭になっていなければならない。すなわち、聞き取る際にも、発音する際にも。

また、語の中の位置によって氣息音となったりならなかったりする [p]、[t] なども取り上げた。pot という単語の [p] と top という単語の [p] は音質が異なっている。単語の始めにある p は強い氣息音を伴うが、単語の中間あるいは末尾での p は氣息音を伴わないからである。同様のことは t についても言えるが、t の場合、単語の中間にある場合、氣息音を伴わない [d] に近い音になることも付け加わる。アメリカ人によって butter という単語が発音される時、ほとんど「バター」と聞こえる——イギリスの発音ではそうではないが。語と語が繋げられて発音されることにより、ひとまとまりに発音される語群の中でも同じ現象が生じる。実際に話されている英語では個々の単語が切り離されて発音されず、音が繋がっていくことを理解するのは、英語を発音する上でも、聞き取る上でも重要であると思われる。例えば、「It is a pen.」という文は、アメリカ人によって実際

に発音されると、「イディザベン」のようになってしまう。tはここでは、単語の途中にある場合と同様に〔d〕に近い音になっている。ひとまとまりの音の連なりの中では、一つの単語の中でと同じ規則が適用されているのである。従って、個々の語の発音指導から、文中での語の連なりをどのように発音するかということへと発展的に理解させることが重要であり、そのような順序で指導した。

発音(3)の授業ではまず、時間的事情で夜の「ビデオによる聞き取りと外国紹介」のプログラムで取り上げることのできなかったビデオを取り上げて、アメリカ人の発音を聞かせた。衛星放送から録画したもので、内容はニューヨークのセントラル・パークに生えている食べられる植物を案内しているツアー・ガイドに関するものであった。一度見せた後、あらかじめ小粥が聞き取って清書しておいたテキストを配り、二度目にはテキストを見ながら聞き取らせた。ビデオに関しては、もう少しゆっくり時間をかけたいところであったが、そのような指導は火曜日に課外に実施している一年生の勉強会(小粥指導)でも継続的に行えるので、今回はそれだけに止めた。

次に、発音(2)を更に発展させて、連なるだけではなく、連なることによって変化する音を取り上げて発音練習を行った。普段の早口の会話の中ではしばしば省略されることのある発音も取り上げた。基本的に昨年度の実習と同じことを指導したので、昨年度の論文に掲載の資料を参照されたい(センター研究紀要第8号274~276頁)。ここで、少し説明を加えれば、例えば、“Did you...?”という疑問文は「ディジュー」のように発音される。〔d〕+〔j〕=〔dʒ〕となるという発音上の規則が存在するのである。更に、この場合、聞き取られるべき大切な音は〔dʒu:]という部分であり、〔di〕は脱落しても聞き手は理解する。普段のなにげない早口の会話では〔dʒu:]とだけ発音される場合もあるのだ。このように、単語と単語は繋がって発音されるだけではなく、繋がる際に音の変質も生じること、またその変質の規則を知ることが重要である。また、どの音が重要で聞き取られるべき音なのかということを理解すると、これもまた、聞き取りの助けになってくる。もっと時間をかけて、聞き取りと連動させて指導できれば、一層効果的であると思われる。

発音指導全般について振り返ると、今年度は昨年度より時間的余裕があった点が良かった。しかし既に指摘したように、継続的な指導を行わなければ、効果は上がらない性質のものである。今回の実習だけでは、実際にどう発音されているかということを知識として知ったということにとどまるであろう。幸い、現在の一年次生は、国際理解教育教室内では小粥が学年の担任ということになっており、毎週火曜に特別に課外の勉強会を小粥の指導の下に行っている。その折に、毎回、短い時間でも発音を取り上げ、練習を続けていく予定である。この勉強会を行っていることの利点は、他にも多々ある。現在の国際理解教育コースのカリキュラムでは、コースの教師たちによる一年次生向けの授業がほとんど無く、一年次生に対する教室としての指導が十分に行えないからである。小粥は今年度後期から二年次生を対象とした「英語圏文化論Ⅰ」という授業を担当しているが、昨今の学生は活字離れが著しいせいも、外国の文化・事情についてあまりにも何も知らないという事実を受け、驚くことばかりである。毎週火曜の勉強会では、特にイギリスの映画を取り上げ、隔週で映画鑑賞も行っている。映画を通して、イギリスの文化・歴史を知ってもらおうという意図だ。そのような補助的指導を一年次から始めなければ、「英語圏文化論」というコース・タイトルに相応しい授業内容を二年次に行うことは困難である。課外で行っている勉

強会（自由参加）が、「国際交流実習Ⅱ」や「英語圏文化論」の授業を補助するものとなって効果を上げてくれればと願っている。

### [さまざまなプログラム]

「国際交流実習Ⅰ」では、授業以外にもさまざまなプログラムが行われた。

9月2日の午後には、徳地少年自然の家近くの湖へのハイキングがあった。まだ残暑の厳しい折だったので、坂を上り下りする厳しいコースは学生には不評であった。春か秋であれば大分違っていただろう。また、参加していた外国人（留学生およびゲスト）との交流の良い機会となるはずであったが、学生たちはおとなしく、彼らになかなか話し掛けていけない。教師が間に入らなければ、会話が始まらないのが不思議であった。それは実習全体についても当てはまる。国際交流というものは、受動的な態度でイベントに参加するものだと思っているのではないか。その辺りの意識の変革が、今後の課題である。

9月2日夜のプログラムではビデオによる外国紹介と聞き取り（1）、次いで徳地少年自然の家の天体望遠鏡による星の観察があった。徳地では肉眼でも信じられないくらい沢山の星が見えるため、このプログラムは大評判であった。ビデオによる外国紹介の方は、用意したビデオの半分を見せ、残りは翌日の（2）で見せるはずであったが、翌日には他のプログラム（バーベキュー）の圧迫を受けて時間がなくなり、（2）の方は行われなかった。中途半端になって残念である。内容は、環境問題を意識した経営を行うイギリスの女性企業家へのインタビューであった。このビデオを選んだ理由は、実は、指導教官たちの事前の話し合いで「環境」を今回の実習の隠れたテーマに決めていたからであるが、全体を見せられなかったこともあって、学生たちの関心をあまり引き付けられなかったようである。英語の聞き取りを同時に指導しようとしたのが、欲張り過ぎだったのだろう。聞き取りのためにテキストを配付し、内容を理解させるために訳までさせたのは良くなかった。聞き取りなら聞き取り、外国事情紹介なら外国事情紹介だけに絞ってやるべきだったろう。聞き取りをするのなら、短いビデオにするべきであった。

9月3日の晩は、ゲストのマルク・レール先生（山口大学経済学部助教授）が、ドイツのリサイクル事情について英語で話してくれた。明瞭な分かりやすい英語で、内容も興味深いものであったが、学生たちにとっては少し難しかったかもしれない。（アンケートを見ると、よく分からなかったと書いている学生がいる。）しかし、レール氏は具体的に目に見える例——ドイツで最近また使われだした買い物用の布袋、リサイクル会社のマークの入った回収可能な商品など——を示してくれたので、理解する補助となったであろう。話の後で小粥が日本語で補助的なコメントをしたので、少なくともポイントが何であったかということは、全員理解したことと思う。しかし、質問が留学生からしか出てこなかったのは残念であった。しかし、学生たちにとっては英語でこのようなある程度知的な内容のまとまった話を聞くのはおそらく初めてだったろうし、良い経験になったと思われる。

レール先生の話の後、台湾からの留学生のシャンイーさんとオーストラリアからの留学生のジェニーさんがそれぞれ自分の国について英語で短く紹介してくれた。ジェニーさんはオーストラリアのリサイクルについても簡単に説明してくれた。

9月4日の晩は、夕食後パーティーとなった。ゲストのアキラ・フルサワ氏（県国際交

流員)とその友人のキャサリンさんからイギリスについての紹介があり、その後、ゲストのジョン・フィリップス先生(山口大学人文学部助教授)の指導でスコッティッシュ・ダンスを皆で踊った。激しい踊りだが、皆おおいに楽しんだ。踊っているうちに目茶苦茶になってしまうところが傑作で、愉快だった。次に実習中準備してきた英語劇を3つのグループが上演した。2日目、3日目にはあまり真面目に練習していなかったが、土壇場で一生懸命仕上げてどうにかやりおおせたようだ。山口駅前のインド料理店「シバ」の店主、新井律子さんが、インド料理を徳地まで出前して下さり、皆で舌鼓を打った。新井さんを囲んで、色々な種類のカレー、シシカバブ、タンドリチキン、ナンなどを食べながら、インド料理についての説明をうかがった。

英語の授業以外に行われたさまざまなプログラムは、異文化を理解したり、外国人の参加者との交流をするのに良い機会となっていたはずなのだが、学生たちは受動的で、積極的に交流する態度が見られなかったことが残念である。それをいかに変えていけるかが、今後の課題であるだろう。外国人に個別に話しかけていけないのは、自信がないからだと思われ、打ち明けてくれた学生がいる。それならば、それをどう変えていけるのか。今後の国際交流実習Ⅰで、英語の授業以外の部分をどういう形で実施していくか、おおいに工夫する必要があると思う。(小粥)

#### [総合評価と今後への課題]

後述するようにいくつかの改善点はあるが、予測通り学生たちには大変好評であり、全体として成功であった。「この5日間は1年間の学習に匹敵する」とまで評した学生もいた。特にシャルコフ先生の授業展開は、学生中心に進められ、学習の楽しさを全員に実感させる、珍しく効果的で驚異的な学習法として歓迎された。既に報告された実施内容と方法から理解されるように、学生を円形に座らせ、少人数での討議と発表を繰り返させ、学生の意識や反応を常に中心に置き、絵や小道具を使いながら平易なものから高度なものへと自然に進め、毎回の到達目標と展開の手順また復習と意味付けが明確に示され実行された。日本では教授法としても注目すべきもので、昨年同様学生達は将来いろいろと採り入れ活用できる点を習得できたと考えられる。

今回は「異文化への感受性」の涵養が特に意識されたテーマとなり、内容の理解に重点が置かれる結果となった。1年次学生の異文化理解に対する理解度と英語の会話能力から必然的に生まれた結果といえる。昨年度と比較して、内容理解については一貫して計画的に順調に展開されたので、初歩的な段階から出発してかなりのレベルにまで到達することができた。特に“why?”と自分に連続的に問いかける進め方により、原点に立ち戻り、自分の目で見て、自分で考え、自分の言葉で説明する一連の訓練を通して、各自が自ら問題点を気づき解決し理解できる方法を習得することにより、一層深く納得できる理解にまで進むことができた。これは大きな成果である。

しかしながら、実践英語の訓練について言えば、学生達の英語での発言量は昨年と比べるとかなり減少した。もちろん、毎日相当量の英語によるレポート作成が課され、また学生の発言に対して常に教師の英語による翻訳と内容確認が実行されたので、英作文の訓練は格段に増加し、模範的な英語の聞き取り訓練もかなりのものと考えられる。しかし、実践英語においては、学生自身の生の英語による発言量と聞き取り量はどうしても最も重要



な側面であるために、この点が今後への課題となった。

「発音練習」は昨年よりも1時間増やしたが、多くの学生はもっと時間をかけた基本練習を望んでいる。中学高校での発音の基礎訓練がいかに不十分であり、学生達にいかにか自信が無いかがわかる。「ビデオによる聞き取り」は、興味深い内容であったがかなり高度で分量が多かったため、学生にはあまり理解されないようであった。しかし、自宅で楽しみながらこのレベルの聞き取り訓練を大いに実行してもらいたいとの勧めが、本来の意図に含まれていたと思われる。

「英語劇」は、学生達の感想文からは、初めての経験者もいたためか、その成果にかなり満足していた。留学生達や外国人参加者達とうまく協力し合いながら、大いに楽しめたと言うのが学生達の実感であるように思えるが、教師の側からはもっと洗練された20分以上の長い劇を期待していたので、昨年よりも不満足な出来であった。総じて学生達は夏の疲れと午前中の授業への緊張から、午後の英語劇の準備と練習にまで余力を残し得なかったのが実情と推測される。

その他のプログラムについては、すでに報告された通りである。

今後への課題は、教師間の話し合いと学生達の意見を総合すると、以下の諸点にまとめられる。

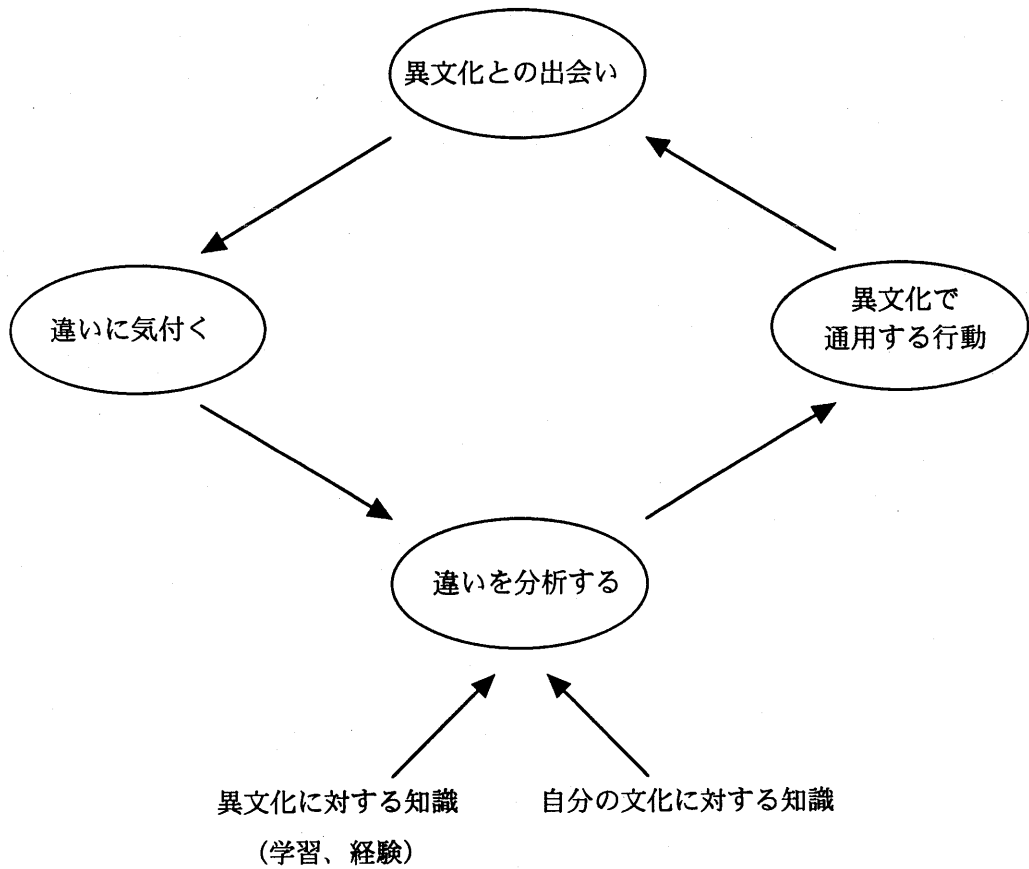
- ① 時期：試験直前の9月初旬を避ける。これまで2回は教師の都合で至し方なかったが、来年度は、前半15時間分を通常の授業の中に組み入れ、後半15時間分を6月の中下旬の週末に2泊3日で実施する試案を考えている。
- ② 実践英語と異文化理解または国際交流の内容や方法論とのバランス：上記①の授業時間配分により、両者のバランスを適切に考慮し実施することができる。次回からは、実践英語の訓練の時間を多めに確保し、外国人参加者との実質的な交流プログラムを更に工夫する。
- ③ 英語劇に対する位置づけを学生達に明確に示し、実施する場合には実践英語の訓練の一環として指導を強化する。
- ④ 外国人ヘルパーの役割を明確に位置づけ、プログラムを工夫し、学生との一層親密な交流を計ってもらえるように、更に詳しく説明し協力を依頼する。
- ⑤ 計画と運営に学生を加えて、実務的な能力の開発と訓練を強化する。

最初に述べたように、新しい分野の実践教育であるために、先ず実践しながら反省し話し合いいろいろと改善を加えて、よりよいものへと発展させていかざるを得ない。本稿をお読みの皆様からいろいろとご教示をいただければ幸いである。 (中村)

国際交流実習 I スケジュール (於：国立山口徳地少年自然の家)

9月1日(月)	当番学生	9月2日(火)	当番学生	9月3日(水)	当番学生	9月4日(木)	当番学生	9月5日(金)	当番学生
13:00 教育学部集合 13:30 山大出発 (教育学部玄関) 14:30 徳地自然の家着 14:45-15:30 オリエンテーション (事務局、中村) 15:30-16:00 宿泊棟への荷物の運 び入れ 16:00-17:00 warm up 17:00- 夕べの集い 18:00- 夕食 19:00-21:00 英語の歌 ゲーム		9:00-10:00 発音(1) (小粥) 10:15-12:00 班別アイスカッションI (シヤルコフ)	当番学生	9:00-10:00 発音(2) (小粥) 10:15-12:00 班別アイスカッションII (シヤルコフ)	当番学生	9:00-10:00 発音(3) (小粥) 10:15-12:00 班別アイスカッションIII (シヤルコフ)	当番学生	9:00-9:15 英語の歌 9:15-10:00 全体会議の準備 10:15-11:15 アイスカッション(4) 1) 各班の報告 2) アイスカッション (シヤルコフ) 11:30-12:00 各自レポート作成(英文)	当番学生
13:00 教育学部集合 13:30 山大出発 (教育学部玄関) 14:30 徳地自然の家着 14:45-15:30 オリエンテーション (事務局、中村) 15:30-16:00 宿泊棟への荷物の運 び入れ 16:00-17:00 warm up 17:00- 夕べの集い 18:00- 夕食 19:00-21:00 英語の歌 ゲーム		12:15-14:45 ハイキング(お弁当) (雨天体育館) 15:00-17:00 英語劇の準備(1)	当番学生	13:00-15:00 アイスク・ゴルフ 15:00-17:00 英語劇の準備(2)	当番学生	13:00-15:00 ホームステイのシミュ レーション(自己紹介) (シヤルコフ、 ジェニー等) 15:00-17:00 英語劇の準備(3)	当番学生	13:00-13:40 全体会議(英語) 1) 国際交流実習Iの感 想 2) 今後への改善点 (シヤルコフ) 13:40-14:20 感想文の作成(日本語) レポートと感想文の提出 14:30-14:50 総評と閉会 15:00 少年自然の家出 発 15:50 山大帰着・解散	当番学生

違いの取り扱いのプロセス



(シャルコフ 1997)

## 資料 2

### Lesson 1, Day One, Evening

Set up: Chairs are arranged in a circle  
Agenda and objectives are on the board but not visible to the group  
Music is playing and flowers are in the room

Materials: Agenda and objectives, cd, cd player, flowers, paper, crayons, index cards, pencil or pen, handout for homework

Time: 2 hours

Objectives: Introduce everyone  
Cooperate in pairs as well as the larger group  
Begin to use feedback  
Use non verbal communication in games  
Talk in English about something that happened this summer  
Talk in English about goals for the workshop

Agenda: 1. Look at objectives  
2. Do two non verbal line ups  
3. Learn everyone's name  
4. Talk about summer vacation in pairs  
5. Fish bowl with three instructors/ questions  
6. The sun and the moon  
7. What's in a hand  
8. What's in a name  
9. Feedback  
10. Homework assignment

#### Procedure:

1. Greet everyone, go over objectives and agenda
2. Tell ss that I want them to circle up alphabetically by first name  
Tell ss they must do this without speaking but they can use gestures, etc.  
When ss have circled up get them to say their names out loud (counsel responses)  
Next have ss circle up alphabetically by favorite summer activity  
Remind ss that there is no speaking allowed  
When ss have finished get everyone to tell us their favorite activity (again counsel responses)
3. Divide the group into two  
Have the two groups make small circles  
Tell ss to think of one goal they have for the next five days, give an example  
Give the ss one minute to think about their goal (anyone who has any questions about the English for their goal can ask me)  
Tell the groups we're going to play a memory game  
Choose the first person in each group  
This person will start the game by saying their name and their goal for the workshop  
The next person will say the same thing and then will say the first person's name and goal  
The next person will repeat the same procedure saying his/ her name and goal

followed by the second and first person's name and goal

This continues until everyone is finished

Have one person in each group introduce everyone and their goal to the entire group (counsel introductions)

4. Tell ss we are going to talk a little about our summer vacations  
Give everyone a piece of paper  
Tell ss that they should draw a simple picture representing one thing that was memorable about this summer  
Give ss about five minutes to do this  
Pair ss up and tell them to tell their partners about their picture and that event  
Ss have one minute to talk about the event then they should switch
5. Have ss sit in chairs in a large circle and have faculty sit in a small circle in the middle of the large circle  
Tell ss the faculty will be talking about two things, something they did this summer and one of their goals for the workshop  
The faculty will talk for about ten minutes and then after the ss will have a chance to answer questions (questions may be in Japanese)
6. Do the Sun and the Moon as per Drama Techniques in Language Teaching by Maley and Duff
7. Do What's in a hand as per Drama Techniques in Language Teaching by Maley and Duff
8. Do What's in a name as per Drama Techniques in Language Teaching by Maley and Duff
9. Do feedback  
Pass out index cards and have ss write their names on the top corner of the card  
On one side the ss should write what they liked about the lesson on the other side they should write about what they didn't like  
Tell them if they don't have one or the other they can leave it blank  
Responses can be in Japanese
10. Give out handouts for reflective writing assignment and explain it  
Ss should do two things tonight  
First, reflect on tonight's class and then take about ten minutes and write about what was different between it and the classes at university  
This can be in Japanese and it doesn't have to be more than a page  
This will be used tomorrow in class  
Second, take another ten minutes and write a brief autobiography of your study of English  
Include how long you have studied it, where, the kind of study e.g. grammar, conversation, etc., how you feel about your English  
This autobiography should be in English and doesn't need to be more than a page

資料 3  
Reflective Writing 1

名前：

1. 今日のパビの授業で、今まで受けた授業のやり方と違う所を書く。そして、なぜパビがこのやり方で授業を進めたかとその理由について簡単に述べてみてください。

2. 今までの自分の英語学習についての話を英語で書いてください。ただし、文中に学習年数、場所、学習内容（例えば文法、会話、など）及び現在の自分の英語力については必ず述べること。

Reflective Writing 2

Name:

- Questions:
- 1) How did it feel to act like an American today in class?
  - 2) Would you act like this in Japan when speaking to a Japanese person?  
Why or why not?
  - 3) How would a Japanese person greet someone who came for a homestay to Japan?
  - 4) What did you learn about culture and language today?
  - 5) What is intercultural sensitivity?

Reflective Writing 3

Name:

- Questions:
- 1) How did it feel to give and receive a gift like an American?
  - 2) How would you give and receive a gift in Japan? Why?
  - 3) What did you learn about culture and language today?
  - 4) What is intercultural sensitivity?

For questions 1 and 3 choose just one point to talk about.

Reflective Writing 4

Name:

- Questions:
- 1) Look at your observations. What can you say about your host sister/brother's family's culture?
  - 2) Look again at your observations. How is this different from what your family does on Sunday?
  - 3) What can you say about your family's culture?
  - 4) What is intercultural sensitivity?

資料 4

Lesson 2, Day Two, morning

Set up: Chairs are arranged in a circle  
Agenda and objectives are on the board but not visible to the group  
Music is playing and flowers are in the room

Materials: Agenda and objectives, cd, cd player, flowers, handouts of conversation, suitcase

Time: 1 hour and 45 minutes

Objectives: Look at classroom culture  
Look at the relationship between language and culture  
Start working on intercultural sensitivity  
Have an experience in American culture  
Work in pairs

Agenda: 1. Objectives  
2. Do warm up activities  
3. Language experience  
4. Process language  
    a. Practice  
    Break  
5. Cultural immersion (four people)  
6. Process culture  
    a. Practice  
7. Feedback  
8. Homework assignment

Procedure:

1. Greet everyone, go over agenda and objectives

2a. Ask ss to stand

Tell ss that I want them to walk around the room and greet everyone without speaking

Tell ss that when they are finished they can sit down

Begin by bowing to the person next to me

After ss are finished ask the ss to stand again

This time have ss go and shake hands with everyone without speaking

When ss are finished they should sit down

2b. Ask the ss if they felt any difference between shaking hands and bowing to each other

Actively listen to the ss

Tell ss that today we are going to begin talking about culture and differences

Tell everyone that first I want to talk a little about question 1 from their homework.

Guide discussion and actively listen to ss responses (this may be a good time to do the observation/ interpretation exercise)

Talk a little about my classroom

a. Pair work is important for practicing English

b. Ss will be asked for feedback following lessons

c. Experiential learning is important

- d. Ss will be asked to process experiences
- e. Looking at differences and thinking about the reasons for differences is important for developing intercultural sensitivity

3. Begin the lesson

Introduce the dialog as the kind of conversation that would happen between a person coming for a homestay to the US and the host family father

Ask ss to listen carefully to the following dialog between Hiroshi and me.

A: Hi, Hiroshi. I'm Mr. Schalkoff. It's nice to finally meet you.

B: It's nice to meet you, too.

A: How was your trip?

B: Really long.

A: You must be tired.

B: Yes, very.

A: Well then, let's get you home.

4. Have ss tell me what they remember of the conversation

Write it down on the board after counseling responses

If ss miss something let them hear it again

Repeat the same procedure

4a. Begin to practice pronunciation using silent way

Do not model

Get the ss to use their knowledge to correct themselves

Erase the first word in the third sentence. Continue with the other words

Do same thing with It's nice to meet you, too.

Have ss practice with the person next to them

Have ss do dialog at normal speed

Have ss do dialog fast, faster

Have ss do dialog angry or sad

Keep track of intonation, etc.

Take a break

5. Introduce intercultural sensitivity with model

Describe it as a process: becoming aware of cultural differences, analyzing experiences with cultural differences, using that analysis to make appropriate actions when interacting with a person from another culture

Tell ss we're going to begin working with the culture found in the language they studied earlier

Ask if anyone has ever been abroad, then if anyone has been to the US

Get four or five s volunteers to come up to the front of the classroom

Split ss in half and have them line up in twos or threes in a single file line with the first ss facing each other

Tell the other ss they will be observers and that they may take notes on what we do

Begin with the first two ss, have them come up to one another shake hands and do the first two parts the dialog

Stress eye contact, firmness of grip, and not too long a handshake

6a. Observation

Have the four ss take their seats after the practice



Switch to Japanese for this section

Ask everyone for any general thoughts or impressions about what happened

Next ask the ss to describe what they had to do during the dialog

Look for how and what but take anything

Write the ss responses on the board (write in two columns- observations and interpretations)

After the work is done point out the difference between observation and interpretation if necessary

6b. Cultural implications

Ask ss what this episode can tell us about American culture

Keep ss grounded in observations, use it as data to make possible conclusions

Ask Why shake hands?, Why make eye contact? Why the firm grip? Why don't we hold on too long?

When appropriate bring in ss culture

6c. Teaching questions

Answer any questions the ss might have

Talk a little about my own experiences and relate them to what the ss have already brought up

6d. Re-simulate

Before doing the simulation for a second time ask ss to reflect on their analysis and how they could use it to be more American this time

Go back and do the immersion again, this time there will be no teaching unless necessary

7. Feedback

Have ss go around and say one thing that they are thinking about the lesson and its content or about how they're feeling in general

Ss are allowed to pass

8. Pass out the handout and explain homework

Ss will do one thing tonight

Reflect on today's class and then take about ten minutes and answer the questions on the handout

This can be in Japanese and it doesn't have to be more than a page

We will talk about this tomorrow in class

## 資料 5

### Key concepts of Day 2 (Schalkoff)

#### 1. Warm up

There is a difference in the way people greet one another. Some bow and some shake hands. Each way has a different feeling.

#### 2. Class culture

When looking at cultural differences there can be observations (facts) and interpretations (feelings).

##### Observations

1. There were flowers.
2. We played games.

##### Interpretations

1. It was a nice atmosphere.
2. Games make learning fun and easy.

We must know the difference between an observation and an interpretation. This is an important skill in intercultural sensitivity. It allows us to make decisions based on facts not just feelings. Sometimes our feelings can get in the way of analyzing a cultural difference.

#### 3. Language experience

A: Hi.

B: Hiroshi? Hi. I'm Mr. Schalkoff. It's nice to finally meet you.

A: It's nice to meet you, too.

B: How was your trip?

A: Really long.

B: You must be tired.

A: Yes, very.

B: Well then, let's get you home.

Rhythm and stress are an important part of good pronunciation.

#### 4. Intercultural sensitivity

Inter means between. Intercultural means between two or more cultures. Sensitivity is the ability to see a difference and adjust to it.

Intercultural sensitivity is a process that has four steps.

- 1) Difference- something different from your culture.
- 2) Awareness- awareness allows you to see the difference. ("Oh, now that's different from my culture.")
- 3) Analysis- using observation ("What happened?") and interpretation ("Why did it happen?") to figure out the difference. Knowledge is needed to answer these questions. Knowledge comes from experience and practice.
- 4) Sensitive action- using careful analysis to make a culturally correct action in response to the difference.

#### 5. Culture experience

The following are your observations and interpretations from today:

##### Observations (what)

1. "It's nice to finally meet you."

2. Shake hands.

-make eye contact, don't bow

##### Interpretations (why)

-touching shows closeness

-shows respect by not hugging

-Americans think host and guest are equal

-smile

-Americans are friendly

-Smiling is important to looking friendly

-shaking hands shows trust

-not too long or strong

3. "It's nice to meet you, too."

5. Bobby's interpretation (these are interpretations not facts):

I think Americans shake hands to get close to someone and feel their personality. To me a strong handshake means a person can be trusted and is of good character. Making eye contact does the same thing. However, a hand shake is also something that shows distance and respect. If I was really close to someone and I felt comfortable showing them the way I feel I would hug them.

I think the handshake originally came from a feeling of wanting others to trust you. In times when people carried weapons (swords and then pistols) putting out a right hand (usually one's shooting hand) showed the other person you weren't carrying anything that could hurt them. This gesture said "trust me."

It is also important to note that in other English speaking countries there are differences in the way people greet one another. Cathy spoke a little about British people using two hands, one to shake and the other to lay on top of both people's hands. The handshake that we worked on today was an American one. I taught this handshake because it is the one I know best not because it is the best or only one.

資料 6

Lesson 3, Day Three, morning

Set up: Chairs are arranged in a circle  
Agenda and objectives are on the board but not visible to the group  
Music is playing and flowers are in the room

Materials: Agenda and objectives, cd, cd player, flowers, handouts of conversation, presents, hashioki

Time: 1 hour 45 minutes

Objectives: Look at what would happen in Japan with host and homestay  
Look at the relationship between language and culture  
Continue working on intercultural sensitivity  
Have an experience in American culture and process it  
Work in pairs

Agenda: 1. Objectives  
2. Do warm up activities  
3. Language experience  
4. Process language  
    a. Practice  
    Break  
5. Cultural immersion (four people)  
6. Process culture  
    a. Practice  
7. Feedback  
8. Homework assignment

Procedure:

Listen to the song

1. Greet everyone, go over agenda and objectives
- 2a. Ask ss to stand up and give everyone person a word.  
Tell them they need to communicate the word to their partner without speaking and using only their hands.  
The partner must guess what it is. They can ask "Is it a duck?, Is it a penguin?"
- 2b. Tell everyone that first I want to talk a little about their homework.  
With your partner I want you to talk about the answers to question 2  
Guide discussion and actively listen to ss responses

Tell the ss we are going to listen to a conversation between our friend Hiroshi and his host mother. Hiroshi is going to give her a gift (omiyage).

3. Ask ss to listen carefully to the following dialog between Hiroshi and Mrs. Schalkoff

A: I brought you a present from Japan. (hand with one hand)

B: Oh, you shouldn't have. May I open it?

A: Yes, sure. I hope you like it.

B: (opens present) Oh, how beautiful. They're just lovely. Thank you so much.

A: You're very welcome.

4. Have ss tell me what they remember of the conversation  
Have cutouts ready to place on the board after counseling responses  
If ss miss something let them hear it again  
Repeat the same procedure
- 4a. Begin to practice pronunciation using silent way  
Do not model. Get the ss to use their knowledge to correct themselves  
Take away the first word in the first sentence. Continue with the other words  
Do same thing with the rest of the dialog.  
Have ss practice with the person next to them  
Have ss do dialog at normal speed  
Have ss do dialog fast, faster  
Have ss do dialog angry or sad  
Keep track of intonation, etc.

Take a break

5. Tell ss we're going to look at the culture behind the language  
Ask if anyone has ever been abroad, then if anyone has been to the US  
Did you bring omiyage? What did you bring?  
Split ss in three groups and have them stand behind or sit in the six chairs put out for this purpose  
Designate one group to be Mrs. S and the other to be Hiroshi. Check their lines  
Stress taking the present right away with one hand, smiling, opening the present, reacting to the present
- 6a. Observation  
Have the ss take their seats after the practice  
Switch to Japanese for this section  
Ask everyone for any general thoughts or impressions about what happened  
Next ask the ss to describe what they had to do during the dialog  
Write the ss responses on the board
- 6b. Cultural implications  
Ask ss what this episode can tell us about American culture  
Keep ss grounded in observations, use it as data to make possible conclusions  
Ask Why say you shouldn't have but take it?, Why open the present then and there? Why talk about how you like it?  
When appropriate bring in ss culture
- 6c. Teaching, questions  
Answer any questions the ss might have  
Talk a little about my own experiences and relate them to what the ss have already brought up
- 6d. Re-simulate  
Ask the ss what they can do this time to make themselves more American in their actions  
Go back and do the immersion again, this time there will be no teaching unless necessary

7. Feedback  
Have ss go around and say one thing that was difficult about the lesson  
Ss are allowed to pass
8. Explain homework  
Ask ss to do some reflective writing tonight  
Tell ss to reflect on what we did today in class and then take about fifteen or twenty minutes and write about four things, 1) how it felt to act like an American in today's class, 2) how would you give and receive omiyage in Japan, 3) what did you learn about language and culture today, 4) what is intercultural sensitivity  
This can be in Japanese and it doesn't have to be more than a page  
We will talk about this tomorrow in class

## 資料 7

### Key concepts of Day 3 (Schalkoff)

#### 1. Warm up

Using imagination is important for doing role plays. We played with an imaginary ball. First, it was small. Then, it was large and heavy.

We went over three questions from the homework, what did it feel like to be an American, what would happen in Japan, and what is intercultural sensitivity. See your homework and classmates homework for more detail.

#### 2. Language experience

A: I brought you a present from Japan.

B: You shouldn't have. May I open it?

A: Of course. I hope you like it.

B: Oh, it's beautiful. They're really lovely. Thank you so much.

A: You're very welcome.

In this language experience we worked on stressing on the words in italics.

#### 3. Culture experience

The following are your observations and interpretations from today:

Observations (what)

Interpretations (why)

1. I brought you a present from Japan.

-give present with one hand

-want person to be able to take it easily, equal to receiver

2. You shouldn't have. May I open it?

-take present with one hand

-say one thing mean another

-same words in Japanese

-express surprise, thanks

-want to get present quicker, happy about getting present

-show happiness

-show how you feel

3. Of course. I hope you like it.

-look and smile

4. Oh, it's beautiful. They're really lovely.

Thank you so much.

-open package roughly

-want to see present, not important to keep paper nice

-show emotion

-make other person feel good

-really show your thankful

-show your emotions

-smile and look

5. You're very welcome

## 資料 8

Lesson 4, Day Four, morning

Set up: Chairs are arranged in a circle  
Agenda and objectives are on the board but not visible to the group  
Music is playing and flowers are in the room

Materials: Agenda and objectives, cd, cd player, flowers, rods

Time: 1 hour 45 minutes

Objectives: Look at homework  
Look at the relationship between language and culture  
Continue working on intercultural sensitivity  
Talk in English about something personal to another person  
Work in pairs  
Prepare for homestay simulation

Agenda: 1. Objectives  
2. Do warm up activities  
3. Language experience  
4. Process language  
    a. Practice  
    Break  
5. Cultural immersion  
6. Process culture  
    a. Practice  
7. Feedback

### Procedure:

1. Greet everyone, go over agenda and objectives
- 2a. Ask ss to get into pairs  
Have one s come up and demonstrate the hand catching game with me  
Tell ss once they have caught their partners hand they should switch  
After about one or two minutes ask the ss to switch  
After one more minute end the game and have ss change partners  
Repeat this one more time and then have the ss sit down next to their new partners
- 2b. Tell everyone that first I want to talk a little about their homework.  
In pairs discuss the five questions and the answers you came up with  
Come back to full group and get a brief report from each pair  
Tell ss today we are going to be talking about their homes but that we'll be doing it in a little different format
3. Have the ss make a half circle with their chairs  
Ask for one volunteer from the group  
Have that person come up and sit with me on the floor  
Sit so that both of us are facing sideways so everyone can see  
Bring out the rods and ask the s to talk about the house and neighborhood they grew up in  
Tell the s to use the rods to show what the house looks like



Instruct the other ss to listen carefully  
As the s does this counsel the description matter-of-factly

When the s is finished counsel back the description, deliberately falter so the s has to help

After finishing the description have the other ss come down to the house and tell us about it

Ask the ss to say only one thing at a time and ask every s to say at least one thing  
Counsel all responses

Now tell the ss they may ask questions about the house and the neighborhood  
Counsel all questions and answers

4. Have ss tell me exactly what happened during the technique  
Now repeat the same procedure in pairs or threes with everyone talking about their house and neighborhood (the s who talked with me should go in a group of three)  
When this is finished take a break

Take a break

5. Tell ss we're going to look at where I grew up in the US  
Have ss look at and listen to me as I use the rods to explain  
After it's finished have the ss tell me about my house, etc. (again they should tell me only one thing at a time and everyone should say at least one thing)  
Ask the ss if they have any questions  
Answer the ss questions

6. Cultural implications  
Ask ss what this tells us about American culture  
Keep ss grounded in observations, use it as data to make possible conclusions  
Ask questions about the town as it compares to a Japanese town.

- 6c. Teaching, questions  
Talk a little about my own experiences and relate them to what the ss have already brought up  
Answer any questions the ss might have

7. Feedback  
Have ss go around and say one thing they liked or didn't like about the class and have them write something about something they feel like they need to know about American culture or intercultural sensitivity in general  
Ss are allowed to pass but everyone must write on one card

## 資料 9

### Lesson 5, Day Four, afternoon Homestay simulation

**Set up:** Chairs are arranged in a circle and in the back there are three big tables with chairs  
Agenda and objectives are on the board but not visible to the group  
Music is playing and flowers are in the room

**Materials:** Agenda and objectives, cd, cd player, flowers, rods, note paper, pens, handouts

**Time:** 2 hours

**Objectives:** Talk in English about your Japanese family to your host family brother or sister  
Listen to your host family brother or sister talk in English about their family  
Become aware of family differences and analyze them  
Work in small groups

**Agenda:**

1. Objectives
2. Do warm up activity
3. Talk about your family to your host brother or sister
4. Listen to your host brother or sister talk about their families
5. Process conversation
6. Reflective writing
7. Feedback

#### Procedure:

1. Greet everyone and go over objectives
2. Line up  
Have ss line up according to the number of family members they have  
Get everyone to tell us how many family members they have
3. When finished have ss, etc. come sit on the floor and in the chairs  
Use the rods to tell ss, etc. to listen to me about what my family does on Sundays  
Get the ss to tell me about my family on Sunday  
Counsel the responses  
Tell the ss, etc. they may ask questions after I finish  
Counsel questions  
Take a break so I can talk to the host brothers and sisters
4. Divide ss into four groups, three or three and one of two  
Tell ss they are going to tell about what their family does on Sunday to their host brother or sisters  
Tell the ss they must say what every member of their family does and they may use the rods to do this  
Their brother or sister may ask them questions about their family  
Introduce the ss to their brother and sisters

Have Jenny, Cathy, Akira, and Shan Yi go to the four corners of the room and wait for their ss

When everyone is situated ask the ss to begin

When all of the ss have finished ask the host brother or sister of each group to call me for new instructions

Take a break

5. Have everyone come back

Tell everyone to go back to their group from before the break

Now have the host sister or brother tell what their family does on Sundays

Ss should follow the same procedure as I used at the beginning

Listen to the story

Say it back to the brother or sister to make sure they've got it right

Ask some questions

6. When the group is finished have the brother or sister call me

Instruct ss to write down individually what the brother or sister's family does.

Do this together and with the brother or sister checking (grammar, etc. is no problem as long as the ss know what happens)

Now give the ss reflective writing handout

資料 1 0

Lesson 7, Day Five, morning

Setting: Chairs are arranged in circle  
Flowers and music.

Materials: index cards, homework from previous nights, handouts from day one and two, pens, cd, cd player, agenda, objectives

Time: 2 hours

Objectives: Think about the most important thing you've learned about language and culture from these four experiences  
Think about the most difficult thing for you in the four experiences  
Think about what intercultural sensitivity means to you now after the four experiences  
Think about one way you've become more interculturally sensitive  
Give feedback about the four experiences

Agenda: 1. Look at objectives  
2. Warm up  
3. Do some reflective writing  
4. Share one thing with the whole group  
5. Feedback on the experiences- process and content

Procedure:

1. Greet everyone and go over agenda and objectives
- 1a. Look at Pat Heller's note for its relationship to the second cultural immersion

Thank you note from Pat Heller

Dear Bobby and Mayumi,

Thank you, thank you for the most gorgeous necklace!!! I have never seen fresh water pearls with such beautiful coloring. This gift was certainly not necessary and not expected. I was happy just being able to help you out.

Jewelry is my "downfall" in life. Walking past jewelry stores takes great efforts and restraints!!

Thank you again, and each time I wear the necklace it will remind me of you both. Sorry I missed seeing you while you were home.

Take Care,  
Pat

- 2a. Line up alphabetically by one new word or phrase you learned during the language experiences
- 2b. Write on back of person  
One group will write "nice to meet you.", the other group will write "oh, you shouldn't have."  
Put the ss into pairs  
Have one s from each pair come turn and face the back of the classroom  
Show the other member the sentence

Now have the ss trace the phrase onto the ss backs  
Tell the ss who are guessing that they may use English to ask their partner to do it again or do it slower or ask questions  
The other partner can only answer questions with a yes or no  
When the pair gets the phrase they should call me  
Have the pair switch and give them the new phrase  
Repeat procedure

3. Tell group we are going to wrap the four cultural experiences that we've done  
These are greetings, gift giving, talking about our hometown, and talking about our families

In order to do this I want to do some reflective writing

This time ss will do it in a little different way

Ss will write briefly in English on index cards about four different things

The four things are:

- 1) The most important thing you've learned about language and culture from these four experiences (green card)
- 2) The most difficult thing for you in the four experiences (purple card)
- 3) What intercultural sensitivity means to you now (orange card)
- 4) One way that you've become more interculturally sensitive (yellow card)

Tell ss to first read through all of their homework and handouts one time to refresh their memory of what we did

Then write enough on each topic to fill the lined side of each card

Tell ss to write their names on the cards

Ss may go anywhere to write the cards

Ss have forty five minutes to do this

I will be here to help ss with any English problems

After forty five minutes please come back here

4. Come back and get everyone into a circle  
Tell the ss to choose one card of their four that they would feel comfortable reading to a small group  
Put ss into two groups of four and one group of three  
Tell ss to read their quotes in English and then if there are questions or discussion that can be done in Japanese or English  
Give the groups about fifteen minutes to share their reflections

5. After they finish have the ss come to the full circle and share one thought of theirs with the group  
This can be anything, how they felt about the experiences, what they learned, what was difficult, etc.  
It should not be read and be simple and short

6. Feedback on process, content, and general comments/ advice all of the lessons thus far  
Hand out index cards for feedback  
The ss may write in Japanese on this

資料 1 1

Lesson 8, Day Five, afternoon

Setting: Chairs are arranged in circle  
Flowers and music

Materials: rods, rod quad, cd, cd player, agenda, objectives

Time: 1 hour

Objectives: Talk in English about one aspect of the workshop  
Talk in English about one future goal for yourself  
Write in Japanese about how you felt about the workshop  
Fill out evaluation for the workshop

Agenda: 1. Look at objectives  
2. Warm up  
3. Do the name/goal game  
4. Do a rod quad  
5. Japanese Kansoubun  
6. Fill out evaluation

Procedure:

1. Greet everyone and go over agenda and objectives
2. Line up alphabetically by what's the first thing you're going to do when you get home.
3. Break up into two groups  
Have everyone think of one goal they have for themselves in the coming months  
Put it into English  
Do the same name game as the first night
4. Have everyone come back to the circle  
Place the quad in the middle  
On the quad are four categories- something I learned, special memory, something I want to do in the future with language and culture, something I want to learn  
Tell everyone to choose a rod  
Tell everyone to choose which topic they want to talk about and put their rod on it  
Now tell them when they are ready to talk about it in English to pick up the rod, bring it back to their seat and talk  
When they are finished the next person can go
5. Turn the program over to Nakamura or Kogai

シャルコフの参照文献

Banks, J. (1988). Multiethnic Education: Theory and practice (2nd ed.) Needham Heights, MA: Allyn & Bacon, Simon & Shuster.

Banks, J. (1991a). Key Concepts for the Multicultural Curriculum. In Teaching Strategies for Ethnic Studies Needham Heights, MA: Allyn & Bacon.

Bennett, J.M. (1986). Modes of Cross-Cultural Training: Conceptualizing Cross-Cultural Training as Education. International Journal of Intercultural Relations, 10, 117-134.

Bennett, M. J. (1993). A developmental approach to training for intercultural sensitivity. International Journal of Intercultural Relations, 10, no.2, 179-195.

Bennett, M. J. (1993). Towards Ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity. In R. Michael Paige (Ed.) Education for the Intercultural Experience (2nd ed.) Yarmouth, ME: Intercultural Press.

Curran, C.A. (1976). Counseling - Learning in Second Languages Apple River, Illinois: Apple River Press.

Damen, L. (1987a). Culture Learning: The Fifth Dimension in the Language Classroom Reading, MA: Addison-Wesley Publishing Co.

Erickson, F. (1997) Culture in Society and in Educational Practices. In J.A. Banks & C.A. McGee Banks (eds.) Multicultural Education: Issues and Perspectives (3rd ed.) Boston: Allyn & Bacon

Gaston, J. (1992). Cultural Awareness Teaching Techniques Brattleboro, VT: Pro Lingua Associates.

Gattegno, C. (1976). the common sense of teaching foreign languages N.Y.: Educational Solutions.

Fantini, A.E. (1997). New Ways in Teaching Culture Alexandria, VA: New Ways Series, TESOL.

Feiler, B.S. (1991). Learning To Bow N.Y.: Ticknor & Fields.

hooks, b. (1994). Teaching to Transgress N.Y.: Routledge.

Kataoka, H.C. (1994). Japanese Cultural Encounters & How to Handle Them Lincolnwood, Illinois: Passport Books.

Kohls, L.R., & Knight, J.M. (1994). Developing Intercultural Awareness Yarmouth, ME: Intercultural Press.

Larsen-Freeman, D. (1986). Techniques and Principles In Language Teaching N.Y.: Oxford University Press.

McKay, S.L. (1992). Teaching English Overseas: An Introduction Oxford: Oxford University Press.

Maley, A., & Duff, A. (1996). Drama Techniques in Language Learning (New ed.) Cambridge: Cambridge University Press.

Omaggio Hadley, A. (1993). Teaching Language in Context (2nd ed.) Boston: Heinle & Heinle.

Paige, R. M. (1993). On the Nature of Intercultural Experiences and Intercultural Education. In R. Michael Paige (Ed.) Education for the Intercultural Experience (2nd ed.) Yarmouth, ME: Intercultural Press.

Seelye, H.N. (1996). In H. Ned Seelye (Ed.) Experiential Activities for Intercultural Learning (Volume 1) Yarmouth, ME: Intercultural Press.

Stevick, E. W. (1980). Teaching Languages, A Way and Ways Boston: Heinle & Heinle.

Tang, Y. (1996). Dialectics of Synergy: An East-West Synthesis San Francisco.

Special thanks to all at the School for International Training, Brattleboro, Vermont. In particular, thanks to Pat Moran, Jack Millett, Ani Hawkinson, and members of SMAT 15 who all gave graciously of their time, ideas, and inspiration to help make this year's workshop a success.